

エリセーエフとネフスキイ

——水田紀久，河合忠信，日野貴夫三氏の問題提起に寄せて——

楡 山 真 一

はじめに

天理図書館報『ビブリア』第100号（平成5年10月），第102号（平成6年10月），第103号（平成7年5月）に，天理図書館蔵「ネフスキー文書」の中から，日本学者セルゲイ・G・エリセーエフ（1889-1975）の「赤露の人質日記」露文草稿と在日の同学の友ニコライ・A・ネフスキイ（1892-1937）宛書簡2通が翻刻されている。翻刻者は河合忠信近畿大学教授と日野貴夫天理大学講師である。なお，エリセーエフが日本語で書いた有名な『赤露の人質日記』（大正10年，大阪朝日新聞社，昭和51年再刊，中公文庫）は，1920年（大正9）9月，ソビエトからフィンランドに脱出後しばらくして書かれた「赤露の人質日記」露文草稿にもとづいている。翻刻の最終回で河合，日野両氏は次のように述べている。

本稿ではまずネフスキー文書のエリセーエフ書簡2通：ロシア革命の年，1917年3月，帝政ロシア崩壊，ケレンスキー内閣誕生の際その印象をネフスキーに書き送った書簡及びその5年後，1922年10月の「露文草稿」の送り状を翻刻紹介し，さらに「露文草稿」をめぐる諸問題について考えてみたい。

そして両氏は，「赤露の人質日記」露文草稿をめぐって，(1)「露文草稿」は原本か写しか，(2)「露文草稿」の欠落部分をめぐって，(3)「ネフスキーとエリセーエフ」の3点を考察している。これらのうち拙稿では，「この問題は解明が最も難しく，推測の域を出ない」と両氏が述べている(3)「ネフスキーとエリセーエフ」を取り上げ，二人の関係について，全面的ではないが一定の解明をおこないたい。

1. エリセーエフの献辞とネフスキイの蔵書印のある『赤露の人質日記』

河合，日野両氏は「ネフスキーとエリセーエフ」の中で，「赤露の人質日記」露文草稿をエリセーエフがネフスキイに送った意図，それを落手したネフスキイのエリセーエフへの応対（これらの問題については，後に独立した章であつかう）を推測した後，水田紀久金蘭短期大学教授の「エ

リセーエフ著ネフスキー旧蔵長谷川幾久雄宛『赤露の人質日記』（大阪芸文研究「混沌」第15号）について、「ネフスキー旧蔵・朝日版「赤露の人質日記」のこと」と題して両氏の考えを述べている。まず、水田氏が提起している問題と推論を検討し、次にこれらにたいする河合、日野両氏の見解の妥当性をたしかめることにしたい。

『赤露の人質日記』は、1921年（大正10）7月から10月にかけて『大阪朝日新聞』に連載後、10月末、朝日新聞社から単行本として刊行された。11月12日付『大阪朝日新聞』夕刊は、『赤露の人質日記』の広告を掲載し、次のように宣伝している。

今夏十回に互り、本紙に掲載され江湖の大喝采を博した『赤露の人質日記』は、多数読者の希望により、盛装を凝らして出版さるゝことになりました。著者エリセーエフ君はわが帝国大学文学部国文科の出身で、日本語の会話は勿論のこと、日本文章まで堂に入ったもので、内地人さへ及びかねる程の腕前です。本書が労農露国の惨憺たる状態をさながらに彷彿せしむること他の幾多の観察記に優れるは読者先刻御承知のこと、思ひます。これと昨年発行した本社中平亮君の『赤色露国の一年間』を併せ読めば、露国の現状が更に一層ハッキリとしてくるでせう、切に一読を勧めます。

この広告文から、『大阪朝日新聞』連載の「赤露の人質日記」は読者の間におおきな反響を呼び起こし、その結果、連載は1本にまとめられて『赤露の人質日記』が刊行されたことがわかる。水田氏は、次のようなエリセーエフの献辞のある『赤露の人質日記』を所蔵しているという。

呈

長谷川幾久雄様

巴里 昭和三十五年

英利世夫

さらに、この『赤露の人質日記』にはネフスキイの蔵書印が押されているらしい。ネフスキイは『赤露の人質日記』を読んでいたのである。「著者署名入りはさることながら、大阪外国語学校教師として大正15年から昭和4年まで足かけ8年間この地に住した東洋学者ネフスキイの旧儲（ママ）とあれば、その相乗的稀覯性は文字通り天下の孤本と称するに足ろう」。これは水田氏にかぎらず、エリセーエフとネフスキイに関心を持っている者なら誰もが抱く想いである。それだけに、氏がこの「孤本」を所蔵するに至った経緯に一言も触れていないのは残念である。

献辞にある「英利世夫」は「エリセーエフ」の漢字への音写である。ロシア人日本学者で最初に名字を漢字で表したのはエヴゲーニイ・G・スバリヴィン（1872-1933）で、大阪朝日の記者高尾某のすすめにより「須春院」の字を当てている。エリセーエフはスバリヴィンに次いで二人目であった。ちなみに、ネフスキイは、「ねふ寿喜以」と「丹生杉」のふたつの大和名を持っていた。1908年（明治41）秋、東京帝国大学入学にあたりエリセーエフは、八杉貞利ロシア語講師に願書執筆の依頼をするよう上田かざとし萬年教授から指示をうけた。日本語で書いた入学願書の署名であるから、八杉は思案したあげく、「かねてからエリセーエフが好きだった画家英一蝶の英の字を

頭にもってきて「英利世夫」がよかろうということで、判コ屋にそのとおりの印鑑をつくらせた」（倉田保雄『エリセーエフの生涯——日本学の始祖』昭和52年）。1960年（昭和35）にパリでエリセーエフから『赤露の人質日記』を「進呈」された長谷川幾久夫（1902-1968）は、札幌の荒物問屋の御曹子で、大正15年に東京商科大学（現在の一橋大学）を卒業した後、北海道植植銀行に就職し監査役まで勤めた。長谷川はレコード、書籍、陶磁器、茶器類のコレクターであった。

ネフスキーの蔵書印とエリセーエフの献辞をめぐる謎を水田紀久氏はこのように推定している。

ところで、架蔵朝日版『赤露の人質日記』の著者の献辞サインと旧蔵者の蔵書印とは、どのように前後するか。その関係はやや複雑で、類推の援用なしには繋がらない。確実なデータは、「英利世夫」（エリセーエフはつねにかく音訳自著した）が昭和35年（1960）にパリで、このネフスキー蔵印のある冊を長谷川幾久雄に贈ったことのみである。（中略）エリセーエフは後輩で友人のネフスキーの蔵書印のある自著を、おそらくその没後、感無量の想いで入手したのであろう。ネフスキーの蔵書と原稿は昭和18年頃イソ夫人の実家から古本屋に渡り、原稿類だけは一括して長谷川氏が500円で購入したが、蔵書の方は離れ離れに東京神田の古書店に現れた（加藤九祚『天の蛇』248頁）。さてこの架蔵本は、果して著者エリセーエフが出版当初、新著としてネフスキーに贈ったものか、ネフスキーがみずから購入したものか、いずれにせよネフスキーはカタカナの蔵書印を押し、先輩エリセーエフのこの息詰まる記録の小冊子を愛蔵していたにちがいない。

肅清の嵐が吹きすさんで、ネフスキーも、そして妻子も帰国後逮捕され、拘置所^{（ママ）}で苦役中、日本の夫人の実家に残されていた遺品類は流出四散し、その愛蔵書だったこの冊も昭和35年の時点では、再び著者エリセーエフに買い戻されて、その手許に在ったと思われる。かねてより、長谷川氏がネフスキーの原稿やノートを入手したとの情報も耳にしていたであろうエリセーエフは、40年前の思い出の自著であり、かつ相似た母国政情の犠牲となった旧友ネフスキーの旧蔵本であるこの冊を、その遺稿蒐集にゆかりのある長谷川氏に、あらためて贈呈したのではなかったか。

「さてこの架蔵本は、果して著者エリセーエフが出版当初、新著としてネフスキーに贈ったものか、ネフスキーがみずから購入したものか」という水田氏の問題提起に答えて、河合忠信、日野貴夫両氏はこれに「露文草稿」を結びつけ、次のように推察している。

このネフスキー旧蔵書は「露文草稿」と共にエリセーエフからネフスキーに送られたものであり、少なくともエリセーエフにとって両書、即ち「露文草稿」と「邦文日記」が一对としてネフスキーの許に置かれることを願っていた。だがネフスキーの帰国後、両者は離れ離れになり曲折の末「邦文日記」は著者エリセーエフの手に入った。だがたまたま長谷川氏がネフスキー文書を購入したことを聞き、再び両者が一对として文書の中に収まるよう氏にこのネフスキー旧蔵書を贈呈したのであろう。やっとならぬエリセーエフの念願が叶って長谷川氏の許で元の鞘に収まった両書だったが、その後運命の悪戯か、また離れ離れになってしまった。

水田氏と河合・日野両氏の推論の違いは1点のみである。水田氏は、『赤露の人質日記』をエリセーエフがネフスキイに贈呈したのか、ネフスキイが買い求めたものか断定しかねているの
にたいし、河合、日野両氏は、「赤露の人質日記」露文草稿と『赤露の人質日記』はひと組にし
てエリセーエフからネフスキイに贈られたと考えている。いずれにしても、『赤露の人質日記』
が長年月を経て水田氏の所蔵に帰すまでの経路を三氏の推測にもとづいて図示すれば、ネフスキ
イ→ネフスキイ夫人^{よろづべ}萬谷磯子の実家→古書店(?)→エリセーエフ→長谷川→古書店(?)→水
田ということになる。ネフスキイの蔵書印とエリセーエフの献辞、四散したネフスキイの蔵書
を考えあわせれば、三氏の推量にとくに無理は感じられない。

2. ネフスキイ旧蔵『赤露の人質日記』の運命

筆者の結論とも関係があるため、それを述べるまえに、ネフスキイの蔵書がたどった道筋につ
いて整理しておこう。

柳田國男は「ネフスキーのノート」（『定本 柳田國男集』昭和46年）という短文で、次のように
書いている。

〔ネフスキイは昭和四年秋に〕帰国する時、細君の実家にノート類をあづけて行つたのである。
それを帰国したきり娘夫婦から何の連絡もないので（事實は妨害されてあたのであるが）親爺さ
んが怒つて、そのノート類をつめた大きなトランク一杯、五十円で、たゞ本を集めてゐるだけ
の人間に売つてしまつた。それを買った男がまたそれを柘植銀行の頭取をしてゐた長谷川とい
ふ人物に五百円で転売した。

ネフスキイはノート類だけでなく、蔵書も妻の実家に預けて帰国した。長谷川幾久雄がネフス
キイの蔵書とノート類を購入した時、彼は頭取ではなく小樽の手宮支店長であつた。萬谷磯子
(1901-1937)の父親幸八郎(1876-1945)がネフスキイの蔵書とノート類を売り払つた相手は、小
樽の大谷成司(当時=40歳)という人物で、彼は『小樽新聞』の記者に次のように述べている。

へーイ、あれがネ。あの本は私が乾物の買出しに^{しやこたん}積丹へ行つた時娘さんがネフスキーさ
んの奥さんになつてゐるといふお爺さんから頼まれ先月こつちへ持つてきて売つたものです。
家に置いても邪魔になつて困り始めは雑品屋にでも売つて早く処分しようと思つてゐましたが
本屋さんに売つた方が少しはいゝだらうと思ひましてネ、・・・あれがそんなに大切なもの
だつたのですか、本屋さんに売つて本当にいゝ事をしました（「土俗学世界の権威ネフスキー博士
の蔵書発見」、『小樽新聞』昭和17年8月17日）。

積丹は北海道^{しりべし}後志国積丹郡（現積丹町）のことで、同郡^{いりか}入舸村に萬谷幸八郎の家があつた。雑
品屋とは今の廃品回収業者のことである。あやうくネフスキイの蔵書とノート類は跡方もなくな
るところであつた。すでにネフスキイ夫妻は、5年前銃殺刑に処されていた。昭和17年に、もし

ネフスキイの蔵書とノート類が消失していれば、ネフスキイの生涯と研究を跡付ける作業は困難をきわめ、わが国とロシアのネフスキイ研究は現在の姿とはよほど掛け離れた貧しいものになっていたにちがいない。大谷からネフスキイの蔵書とノート類を買取ったのは、やはり小樽の石川八郎（当=29歳）という若い古書店主であった。石川は『小樽新聞』の記者に、「こんな貴重な書物は一冊づゝはなさずは是非まとめて斯界の研究家に買上げて貰ひたい気持ち」（「土俗学世界の権威ネフスキー博士の蔵書発見」）であると語っている。これをうけて、ネフスキイがロシア語教師としてかつて勤務した小樽高等商業学校の^{とまぢ}苫地英俊校長は、『小樽新聞』の取材に次のように答えている。

私はネフスキー氏とは七・八ヶ月一緒にをり彼は私の部屋へよく遊びにきたものです、私が感心したのは彼が草書を読むことです、外人で如何に日本語が達者でも草書を読みこなすのはちよつとみた事がない、彼の話は何時も専ら古典文学を話し若い私が別に興味も覚えませんでした、それでもよく私の本を借りて行つた、また彼は蒙古の風俗、日本各地の方言、俚俗等も盛んに語り我が神代の話は我々よりくはしかつた、彼が研究した本が小樽に現はれたとは意外だ、全部纏めて“文庫”を設け斯界の学徒の便益を図りたいものです（「土俗学世界の権威ネフスキー博士の蔵書発見」）。

しかし、値段が折り合わなかったのか、ネフスキイの研究資料の内容と実業専門学校の学風とがなじまなかったのか、ネフスキイの蔵書とノート類は小樽高商には入らなかった。

石川八郎は、昭和17年、謄写版刷18頁の「ニコライ・アレクサトロヴィッチ・ネフスキー先生の蔵書目録」を作成し、同好の蔵書家に配布した。その第1頁には「御挨拶」として次のような言葉が掲げられている。

今般民俗、土俗、言語学の権威者ニコライ・アレクサトロヴィッチ先生の蔵書を入手発見致しましたので普く御同好の各位に目録として御案内を申し上げます。

其内容は、和書、英書、露書に涉り先生御研究の日本古文書各地の土俗方言研究書、言語学、神話、伝説等の各種多方面であります、版本はもちろん、書写、ノート、切抜まで保存せられて御座います。成るべく一纏めとして御希望の方に御納め申し度い考へてありますが、御一覽の上何卒御申込の程を伏して願ひ上げます。

昭和十七年八月

小樽市稲穂町都通り
石川書店 主

石川の分類に従えば、ネフスキイの蔵書目録には和書118点、雑誌・新聞の切抜81点、肉筆プリント・抜刷7点、琉球宮古島語集136枚、言語・考古・風俗・土俗学研究ノート30余冊、言語カード700枚、写真原版・貴重研究資料100余枚、雑誌約100点、洋書43点、洋雑誌11点が挙げられている。書籍類約360点、ノートその他約1000点、総計1360点余りである。ところが、どうした

ことか目録には『赤露の人質日記』の記載はなく、またエリセーエフの著作は1点も含まれていない。これら千数百点にのぼる書籍、ノート類がネフスキイが所蔵していたすべての資料ではない。ネフスキイは帰国直前、歴史民族学者松本信広（1897-1981）に所蔵の民俗学・言語学関係の雑誌の切抜・抜刷・稿本102点を贈ったようである。こちらにもエリセーエフの著作はみられない。これらは現在、「ネフスキー文庫」として、慶応義塾大学言語文化研究所に保存されている。さらに、帰国するネフスキイが当面必要な研究資料や愛蔵の書籍を携行したことは当然考えられる。『赤露の人質日記』をネフスキイは故国へ持ち帰ったのであろうか。あるいは、帰国後、ネフスキイが妻の磯子に日本からソビエトへ送らせた書物の中に『赤露の人質日記』も入っていたのであろうか。

小樽高商がネフスキイの蔵書とノート類を買い取る話が立消えになってから丸2年後、長谷川幾久雄がこれを手に入れた。そのいきさつを長谷川は私家版『私の蒐集遍歴』（昭和38年）の中でこのように述べている。

昭和十九年の或る日、小樽劇場前の石川八郎君の店に行くと「古語拾遺」といふ余り見慣れない本がウインドウにあるので値段を聞くと「これ一つでは売れません。これはネフスキー氏の蔵書で纏めて一括して買つて貰ふことになつて居ります」試みにカタログを見せて貰うと、芳賀矢一「考証今昔物語」藤岡作太郎「鎌倉室町時代文学史」橋守部「万葉集檜嬢手」佐々木信綱「梁塵秘抄」等の日本古典物から、柳田国男「遠野物語」「時代と農政」^(マ)国書刊行会「民間風俗年中行事」喜多川守貞「類聚近世風俗史」「佐賀県方言辞典」「荘内方言考」「大日本方言地図」等から、「善光寺物語」「真宗沖繩開発前史」「諏訪神社史料」「穴守稲荷縁起」等の社寺由来記から、果ては「禅学問答」「俱舍論指針」「漢和对訳妙法蓮華経」等の仏教書までである。支那では「古文真宝」「莊子」「中庸」「易経」欧文では一半を占めるロシア語の本はわからないから別として、英語ではフレーザーの「金枝篇」「諸王の魔術的紀元」「旧訳聖書の民俗学」独仏語の民俗学諸書、其他「ギリシヤ文典」「サンスクリット文典」「印度語辞典」「俄華辞典」「蒙古語辞典」等の辞典類があるのです。

上に長谷川が挙げている諸書のうち、中国語、ロシア語、フランス語の書籍は、前記のネフスキイの蔵書目録には記載がない（ただ、1点『言語学入門』試験心得」という著者不明のロシア語パンフレットがあり、これは加藤九祚氏が古書店で入手したという。加藤九祚「ニコライ・ネフスキーの蔵書目録」、1989年8月16日『北海道新聞』夕刊）。石川八郎は、蔵書目録の「御挨拶」のなかで「其内容は、和書、英書、露書に涉り、……」と述べていたことを想起したい。また、長谷川は、ロシア語書籍は欧文書籍のなかで半ばをしめていたと書いていた。したがって、現在、我々が手にしている「ニコライ・アレクサトロヴィッチ・ネフスキー先生の蔵書目録」^(マ)には大きな不備があり、十全な目録には程遠いと言うことができる。昭和19年、石川古書店店頭で長谷川が見たカタログこそネフスキイの蔵書とノート類の完全な目録であった。この目録には、『赤露の人質日記』も記載されていたはずである。

話をもとに戻す。続けて長谷川は次のように書いている。

欧文関係は別として日本の本のみを見ても、従来日本人の私すら一度も読んだ事がない本を読み、而も雑多な種類を含んで居て、一人の人間の頭脳でよくこういふ種類の本の間に関連をつけ興味を持つとは、一体どういふ人かと聞くと「帝政ロシア時代の留学生でしたが本国の革命で送金が絶えたので、小樽高商の露語の教師を勤め大阪外語に転じましたが、昭和三年ソフイエツトに帰るに当り積丹にある奥さんの実家に此等の本を残して行つたのですが、相当年数が経つたので事の事に反古屋に渡される所を私が取留めたのです。この外にノートが一山あります」それでそのノートを見せて貰ふと本当に驚いた。私も学生時代ノートをピツタリ一冊書上げるのは並大抵でないことを承知して居りましたので、それが数十冊二三尺の高さに積上げられて居るのを見て、筆者の容易ならぬ努力に大に感服したのです。内容は露語あり、日本語あり、或は漢字に似て漢字にあらず、得体の知れない文字—それは後で西夏文字とわかりました—で書いた辞引みたいなものがあり、皆目わかりませんが兎も角異常な努力を以て一つの研究に打込んで居るのだけはわかつた。わかりもしない物を買つても仕様がないうと、又値段も相当に高いので其儘帰りましたが、夜半昼間のことを思出して居る中に「わからないからと捨てる的一生其儘だ、最初わからない事を段々とわかつて行くのも一つの興味ある読書法ではないか、殊に外国人として我々も難渋する日本古典にあゝまで打ち込むのは余程面白い事があるに違いない、差当りあの本の意味がわかるだけでも大した事だ、あのわからないノートだつて、子供が大きくなつたら外人学者はこんなにも勉強するものだと励ましにもなるだろう」

こうして長谷川幾久雄は、石川古書店からネフスキイの蔵書とノート類を一括購入した。『赤露の人質日記』も同時に長谷川の手元に移ったと考えられる。柳田國男も加藤九祚氏も、長谷川が買ったのはノート類であると書いているが、これは正しくない。ほどなく長谷川は小樽から札幌に転勤となった。長谷川が所蔵することとなったネフスキイのノート類は学問的に内外の学者の関心を集めた。ネフスキイと親しかった民族学者の岡正雄（1898-1982）は、ネフスキー著、岡正雄編『月と不死』（昭和46年）の「編者はしがき」の中で次のように書いている。

戦争中の昭和一九年（あるいは一八年）の夏、講演のため札幌に滞在中、わたしは銀行家の長谷川幾久雄氏の来訪をうけた。わたしは、氏が市内の古書店で求められたという沢山の大学ノートを見せられ、これは価値あるものだろうかかと質ねられた。驚いたことに、このうず高い包みこそは、ネフスキー教授が日本（小樽の奥さんの実家）に置いていかれた西夏語やアヤゴやアイヌ語、その他の研究ノートであったのだ。東京に帰ってから、柳田先生にもこのことを報告したが、先生がこのノートについて『故郷七十年』の中で書いておられることは周知の通りである。戦後になって、かつてネフスキー教授の教えをうけたという日本政治史の研究者トペハ氏が来日され、わたしは長谷川氏と同道で、このノートと同氏に見せたのであるが、その際トペハ氏は、今、ソ連の科学アカデミーでネフスキーの『西夏言語学』その他の遺稿の出版が準備されており、もしできたら、このノートの中で適当なものをこれらに載せたいという意向を洩らされた。わたしとしては、はじめて確実に、ネフスキー教授が「名誉回復」されたことを知ったのである。

長谷川幾久雄と岡正雄が札幌で会ったのは、もちろん、昭和19年である。そして、長谷川がネフスキイの蔵書、ノート類を買ったのは札幌ではなく小樽であったことも我々はすでに知っている。ピョートル・P・トペーハ（1905-1985）が、東洋諸国と西洋諸国間の文化関係をテーマにした国際会議に出席するため来日したのは1957年秋のことであった。この会議について書いた文章の中で、トペーハはこのように述べている。「日本人学者たちは我々に、有名な日本学者N・A・ネフスキイの原稿のサンプルを、すなわち西夏語辞典の原稿、その他の資料を見せてくれた」（P・P・トペーハ「東洋諸国と西洋諸国との文化関係の拡大」、『ソビエト科学アカデミー通報』モスクワ、1958年、第5号）。

長谷川が所蔵するネフスキイ旧蔵書は、彼が神田の古書店に売却したと考えられる。

以上のことから、ネフスキイの蔵書は、ネフスキイ→萬谷幸八郎→大谷成司→石川古書店→長谷川幾久雄→神田の古書店（？）という経路をたどっていることが明らかになった。これはまた、ネフスキイの蔵書の1冊だった『赤露の人質日記』が経た道筋でもあったと推察される。ノート等のネフスキイの原稿類は、後に長谷川幾久雄から天理図書館に移った。これが、いわゆる「ネフスキー文書」である。

3. エリセーエフにも筆の誤り

ネフスキイの蔵書印とエリセーエフの献辞のある『赤露の人質日記』がたどった経路——水田、河合、日野三氏の推測にもとづく経路①と筆者が明らかにした経路②を比較してみよう。

①ネフスキイ→ネフスキイ夫人磯子の実家→古書店（？）→エリセーエフ→長谷川幾久雄→古書店（？）→水田紀久

②ネフスキイ→萬谷幸八郎→大谷成司→石川古書店→長谷川幾久雄→神田の古書店（？）→水田紀久

注目すべき個所は、経路①の「エリセーエフ→長谷川幾久雄」と経路②の「石川古書店→長谷川幾久雄」である。ネフスキイ旧蔵『赤露の人質日記』は経路②を経ていることはほぼ確実であるから、これが長谷川の手には渡る前にエリセーエフが入手していなければ、彼は長谷川に献辞を書くことなどできない。そうすると、エリセーエフは、萬谷幸八郎、大谷成司、石川古書店の三者のいずれかから、件の『赤露の人質日記』を入手したという奇妙なことになる。経路①には、なにか問題がありそうである。

では、「呈 長谷川幾久雄様」というエリセーエフの献辞はどのように理解すればいいのだろうか。長谷川は『私の蒐集遍歴』の「四、余 録 (三) ネフスキー始末記」で、このように述べている。

私の様に掘出物の少ない蒐集家に取りネフスキー原稿の入手はガラクタの中に宝石が交つたやうなもので例外中の例外だが、ネフスキーもスターリン没後見直されて改めてレニー賞^(マ マ)を受

けられるし、その遺稿の西夏語辞典も二冊出版されて日本にも来て居る位だから其オリジンの原稿は世界的価値があると私が自惚れても万更嘘でもあります。昭和三十五年渡欧するに当りこれの一つ外国にも自慢してやれとサンプルを携帯して行きました。途中カイロのヒルトン、ホテルで天理教の真柱^{しんばしら}中山正善^{しやうぜん}氏に会いましたが有名な書物蒐集家なのでこれを見せました所直ぐその価値を認識されましたが同行者が美術商連中だったので初対面の私も商人と誤解された為か「幾らか」と値段を聞かれました。「冗談じゃありません、これは売物でなくマルコポーロのゼラダ本の発見者たる英国のサア、パーシバル、ディビットとネフスキイの友人のエリセフに見せる為に特つて来たのです」

昭和35年、長谷川幾久雄は美術観賞旅行（？）で、ヨーロッパへ赴いた。その際、彼は自慢のネフスキイの原稿の一部をエリセーエフ等に見せるため持参した。それから数年後、ネフスキイのノート類が天理図書館に入ったことを思えば、長谷川が渡欧中、天理教の2代目真柱中山正善（1905-1967）と出会い、ネフスキイの原稿をめぐって話を交わしているのは奇縁である。このとき中山は、国際宗教学宗教史学会に出席するとともにローマオリンピック視察員として渡欧していた（中山正善『六十年の道草』昭和53年）。

さて、パリでエリセーエフに会った長谷川は自著の中で、次のように述べている。

私は彼が日本で出版した大正十年大阪朝日新聞社発行の「赤露の人質日記」がネフスキイの蔵書中にあったのでこれを差出した所巻頭の写真を見て「これは五十年前の私の学生時代の写真だ」と云って懐かしさうに見て居ましたが「呈、長谷川幾久雄様、巴利、昭和三十五年、英利世夫」と漢字で署名してくれました。

一方、エリセーエフは、昭和35年師走、パリから友人の東洋学者石浜純太郎（1888-1968）にあてた年賀状（大阪外国語大学附属図書館石浜文庫蔵）に、次のように書いている。

先日チエルヌスキ博物館で長谷川幾久雄様に逢ひましてその「私の蒐集遍歴」を戴いてその中に特にネフスキイ君の蔵書と原稿は長谷川様の手に入れた事件を面白く拝読しました。

水田、河合、日野三氏の疑問は一挙に氷解した。ネフスキイ旧蔵『赤露の人質日記』は、長谷川幾久雄が石川古書店から購入したネフスキイ蔵書にやはり含まれていた。三氏にあれこれ想像を逞しくさせた責任はエリセーエフにある。考えてみれば、「呈 長谷川幾久雄様」という献辞はおかしいと言わなければならない。ネフスキイ旧蔵『赤露の人質日記』の所有者は、エリセーエフではなく長谷川だったからである。日本語に通じたエリセーエフにも、筆の誤りがあったのである。

4. 10月革命までのエリセーエフとネフスキイ

河合、日野両氏が提起したエリセーエフとネフスキイの関係をめぐるとの問題にはいる前に、1917年（大正6）の10月革命までの両者の繋がりをみておこう。

エリセーエフとネフスキイの最初の対面はいつ、どこで行われたのであろうか。状況証拠しかないが、それは1913年（大正2）夏、東京でのことだったのではあるまいか。この時、わが国に留学して6年目のエリセーエフ（当時=24歳）は、東京帝国大学大学院で芭蕉の研究をしていた。エリセーエフが日本研究を志す契機となるのは、研究者としての彼の資質を認め、やがて彼をペテルブルグ大学へ呼ぶ心積もりがあった同大学のインド学者セルゲイ・F・オリデンプルグ（1863-1934）との出会いであった。エリセーエフはベルリン大学を卒業した後、さらに東京帝国大学で学んでいた。時機至り、ペテルブルグ大学から東京のエリセーエフの許へ使者がやって来た。エリセーエフの弟子エドウィン・O・ライシャワー（1910-1990）は、恩師の小伝に次のように書いている。

1913年の夏、その大学の中国語教授アレクシス・イヴァノフが東京にエリセーエフを訪れて、自分と自分の同僚たちは、訓練をつんだ人物を教授陣に迎えるつもりだと彼に告げた。当時いたただひとりの日本語講師は、明治時代の初めにロシアにやって来た黒野という日本人で、時代遅れの日本語をはなし、とにかく、日本語より漢文に興味があるということを彼に説明した（エドウィン・O・ライシャワー「セルジュ・エリセーエフ」、『ハーヴァード・ジャーナル・オブ・アジアティック・スタディーズ』1957年11月、第6号）。

アレクセイ・I・イヴァノフ（1878-1937）は西夏語学者で、ネフスキイの中国語と日本語の恩師である。後年、ネフスキイが日本に留学するにあたり、彼は大いに力を尽くした。後に師弟はスターリン主義の粛清で落命する。イヴァノフが来日したおなじ年の5月5日から9月8日までの4ヶ月間、ネフスキイ（当時=21歳）もペテルブルグ大学の学術研究出張員としてはじめて来日し、東京で日本文学の研究をおこなった（ヴラヂェミル・M・アルバートフ「言語・文化の歴史からニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキイ」、『ロシア科学アカデミー紀要』文学・言語シリーズ第52号第6号、1993年）。推測にすぎないが、イヴァノフとネフスキイは一緒に来日し、東京でエリセーエフとネフスキイは初対面の挨拶を交わしたのではなかったか。

エリセーエフは、翌1914年（大正3）7月16日に帰国し、ペトログラード大学の博士課程に入学した。講師になるためには博士号の取得が必要であった。彼が帰国した年、ドイツとの戦争がはじまり、首都ペテルブルグ〔「ピョートル大帝の都市」の意〕はペトログラードと改名されていた。ドイツ語のブルグを嫌い、スラブ語のグラードにしたのである。一方、ネフスキイは、翌年3月、やがてペトログラード大学の教壇に立つ準備のため、日本語の研修と神道研究を目的として1年間の予定でわが国に派遣されてきた。その後、ネフスキイの留学期間は数度更新された。そして母国での革命と内戦、日本女性との間に子供をもうけたりしたため、ネフスキイは帰国で

きなくなり、結局、留学期間もふくめ15年間わが国に滞在することになる。

1916年（大正5）1月、エリセーエフはペトログラード大学の日本語専任講師になった。その後、外務省の公式通訳の委託をうけ、また、ペトログラード商業会議所の極東部副部長に選ばれている。この年の夏、エリセーエフはペトログラード大学に提出する博士論文（芭蕉研究）の資料蒐集のため来日した。この時のことであろうか、民俗学者の中山太郎（1876-1947）は、「エリセーエフ氏は、我が帝大の課程を終へて、文学士になつた篤学のお方で、在京中に、私も同国人である、学友ネフスキー氏に伴はれて、お訪ねしたことがあります」（中山太郎『日本民俗学 風俗篇』昭和52年）と述べている。

ペトログラードからエリセーエフは、1917年（大正6）3月13日（露曆）付で、次のような書き出しではじまる書簡をネフスキイに送ってきた。

親愛なるコーリヤ、万歳を叫べ、天井まで跳び上がれ。いよいよ僕たちはロマノフ一家を帝位から叩き落とし、ロシアに正真正銘の革命をおこした。ニコライ二世の逮捕を報じた新聞の切抜と最近の出来事すべての大要を君がみいだせる臨時政府通報第一号を送ります。僕がそちらに行くまでこれを取っておいてください。

2月革命をエリセーエフは双手をあげて迎えた。5月、前年とおなじ目的をもってエリセーエフは来日した。東京でのエリセーエフとネフスキイの話題がもっぱら2月革命に集中したことは容易に想像できる。ネフスキイはエリセーエフと同様、あるいは、彼以上に母国の革命に共感をよせていたと思われる。大学時代のネフスキイの夢は、将来、外交畑で得意の語学（とくに中国語と日本語）を活かすことであった。ところが、帝政ロシア時代、外交の分野で就職するには出自が問われた。両親が町人階層出身のネフスキイは、学問の世界に進路を変えざるをえなかった。ネフスキイが最晩年に拘置所で親しくしていた未決囚V・I・チチャノフは、後年、このように述べている。

このことが彼にひどく悔しい思いをさせ、当時の現行社会体制にたいする内奥に潜む憤懣が彼の中に生まれた（「永遠の窓ガラスの上に……。ニコライ・ネフスキイ。翻訳、研究、伝記資料」、『ペテルブルグの東洋学』第8号、サンクト・ペテルブルグ、1966年）。

エリセーエフとネフスキイにとり、大正6年夏の対面が直接言葉をかわす最後の機会となった。10月頃、エリセーエフはペトログラードに帰着したが、5月の出国時と空気は一変していた。ボリシェヴィキイ革命がはじまろうとしていた。滞日中、雑誌社から依頼があったのであろう、エリセーエフは「露西亜に於ける日本研究」（『帝国文学』第23巻10月号、大正6年）と題する文章を書いている。ペトログラード大学の項で、ネフスキイのことが次のように触れられている。

東洋文科に日本学科が置かれてゐる。学級は四年制で、日本歴史、日本文学、日本宗教（神道は在日留学生、ネフスキー氏の帰朝を待つて開講される筈で、現在は専ら仏教を教授してゐる。）、……

エリセーエフ自身は日本文学と現代日本語を教えていた。ネフスキイはやがてエリセーエフの同僚となるはずであった。

5. ネフスキイに送られた「赤露の人質日記」露文草稿

1917年（大正6）10月24-25日（露暦），ケレンスキイ臨時政府が打倒され，レーニンを首班とする人民委員会議が成立した。革命から数ヶ月後，激動する労農ロシアについて，ネフスキイはわが国の新聞社のインタビューをうけた。その中で彼はエリセーエフのことを次のように述べている。

私は政治に就いて何等の主義も意見もありませんが，只露国が一日も早く秩序を恢復して呉れば好いと祈つて居ます，私は露国に家族もなく，私有財産も持つて居らぬから，過激派が何んなに乱暴しても，影響はありません，只ペトログラードの大学から派遣されて居て学資は大学から送つて貰つて居るから若し大学が潰れてしまへば私も学問の仕甲斐のない事になるのですが，過激派も流石に学問の独立だけは尊重して居ると見え，大学では講義も続いて行はれて居るらしいです，が日本留学から帰つてペテログラードの大学で講義をして居る筈のエリセーエフ君からも，音信はピタリと絶えてしまひました，エリセーエフ君は過激派反対ですから，悪い影響を受けやしないかと心配して居ます何しろ今の有様では行く先々何うなるか別りません（「悲しき運命の我が故国よ」、『時事新報』大正7年2月26日）。

2月革命に共鳴していたエリセーエフは，当然ながら，労農革命には批判的であった。「露西亜の各階級と各政党は互いに自分の主義を妥協し合つて一致」して組織する「ごく国民的な政府」（『赤露の人質日記』）をエリセーエフは望んでいた。実妹の夫の銃殺，飢餓，エリセーエフ自身の逮捕，財産の没収など，ネフスキイが案じたように，エリセーエフはさまざまな苦難に逢つた。病気の息子を海外で治療させようと，エリセーエフは数度旅券を申請したが却下された。これがエリセーエフの一家に亡命を決意させた。

1922年（大正11）10月25日付で，亡命先のパリからエリセーエフは，大阪のネフスキイに次のような書簡を添えて「赤露の人質日記」露文草稿を送ってきた。

親愛なるコーリヤ，これはロシア・ソビエト連邦社会主義共和国における僕たちの生活記録の書簡です。君宛の書簡は別便で送ります。

「ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国における僕たちの生活記録の書簡」というのは、「赤露の人質日記」露文草稿のことである。これは，1920年末から翌年はじめにかけて，脱出先のヘルシンキから，エリセーエフがパリ在住の義妹に数次にわたって書き送ったボリシェヴィキイ政権下の日記体の生活記録（1918年6月-1920年9月24日）である。別便のネフスキイ宛書簡の所在は，現在，不明である。

河合忠信、日野貴夫両氏は、エリセーエフがネフスキイに「赤露の人質日記」露文草稿を送った意図を次のように推察している。

この草稿は一九一七年三月以来の無沙汰を釈明する書簡とも言える。（中略）でもただそれだけでなく当時革命後の祖国へ帰らず大阪外国語学校のロシア語教師として日本の東洋学者や民俗学者達と交流、活躍していたネフスキイに自らの日本亡命はじめ日本文学研究などに関して色々と助力を乞う意図もあったのではなかろうか。

「一九一七年三月以来の無沙汰」は「一九一七年秋以来の無沙汰」が正確である。エリセーエフの日本亡命に関して、倉田保雄氏は次のように明言している。

なぜ亡命先に住みなれた日本を選ばずにフランスを選んだのか。実はエリセーエフ自身は、何度か日本への亡命を考えたのだが、自分はそれでもよいが、二人の子供たちの将来を考えるとやはりヨーロッパに留まっている方がよいとの結論に達し、パリ行きを決心したのだ（中公文庫版『赤露の人質日記』解説）。

筆者の考えでは、エリセーエフが「赤露の人質日記」露文草稿をネフスキイに送った理由はただひとつ、ボリシェヴィキ政権下のロシアへ戻ってはならないという年少の友人にたいする強い警告であった。

そして、「赤露の人質日記」露文草稿を落手したネフスキイのエリセーエフへの応対を、河合、日野両氏はこのように「憶測」している。

コンラドやアレクセーエフなど在外の諸学者と繁く交信し、既に自らも帰国を決めていたネフスキイにとっては本草稿は興味ある記録であっても、もはや自分とは異なる世界に住むかつての友人の書いたものにすぎなかった。おそらく一読後他の書簡や原稿類と一緒に書斎のどこかに仕舞い込み、その後顧みることもなかったであろうし、またこの時を境に二人の、エリセーエフ・ネフスキイの交りは断絶したと言える。

労農ロシアを後にしたエリセーエフとそこへ戻ろうとしているネフスキイ——互いに住む世界が異なるから、二人の交友関係は「断絶した」と河合、日野両氏は強い調子で述べている。実際そうであったかどうか、以下で検討してみよう。なお、上の文中に名前があがっているヴァシーリイ・M・アレクセーエフ（1881-1951）はペトログラード大学の中国学者でネフスキイの恩師である。

1922年（大正11）から大阪外国語学校教師となったネフスキイは、蒙古語選科委託生の石浜純太郎と親しくなり、二人してわが国の西夏語研究をリードしたことはよく知られている。石浜はエリセーエフの思い出を綴った文章の中でこのように書いている。

私は大阪外国語学校へ露語の教師として赴任してきた日本学者たちと相知るに至ったが、彼等

とよくエリセエフ君の噂をしてゐたものである（「アメリカの一東洋学者」、『東西』第1巻第3号、1946年）。

「露語の教師として赴任してきた日本学者たち」とは、ネフスキイとオレスト・V・プレトネル（1892-1970）のことである。プレトネルの赴任は大正13年である。ネフスキイに「赤露の人質日記」露文草稿が送られてきたのは、それより1年半前のことだった。石浜、ネフスキイ、プレトネルの三人は、これを話題にエリセエフの噂をしたのである。1924年夏、石浜が渡欧するにあたり、6月某日、ネフスキイは彼をアレクセエフに紹介する文章を書いた。この紹介状（大阪外国語大学附属図書館石浜文庫蔵）には次のようにエリセエフの名前がみえる。

ところで、あなたに転送するために、小論文「天の蛇としての虹の観念」を彼〔石浜純太郎〕に持たせてエリセエフに送りました。（中略）

直接〔私宛に〕出された書簡は、今のところまだ届きませんから、エリセエフを介してお便りをください。

「石浜純太郎先生年譜略」（『石浜先生古希記念東洋学論叢』昭和33年）の大正13年7月6日の項には、次のように記されている。

京都帝国大学教授内藤虎次郎氏に随伴し内藤乾吉氏と共に東洋語書籍調査のため ヨーロッパにむけ神戸を出帆す 上海停船中董康氏を訪う 同地より 鴛淵一氏行に加わる マルセエユに上陸 パリを経て ロンドンにおもむき かねてより留学中の今西龍氏も加わりて 大英博物館において約一ヶ月間敦煌遺書等を調査す ついでドイツ オーストリア スイス に遊ぶ ウィーンにおいては 留学中の 上原専禄氏の案内を得 後パリの 国民図書館及び Paul Pelliot 氏宅において敦煌遺書を調査す 時に Serge Elisséeff 氏 松本信広氏 等もパリに在り調査につき斡旋援助せらる 滞在約二ヶ月 帰途ロシア アメリカ旅行を企つるもいずれも果さず イタリアを旅行し 十二月二十八日マルセエユより乗船

パリで石浜純太郎はエリセエフに会い、ネフスキイの依頼を果たしたであろう。そしてエリセエフは、ネフスキイの論文をレニングラードのアレクセエフへ送ったはずである。「天の蛇としての虹の観念」は『学術-社会活動50周年記念に寄せて セルゲイ・フォードロヴィチ・オリデンプルグに。1882-1932』（レニングラード、1934年）に掲載された。理由は不明だが、石浜はロシアとアメリカへは足を延ばすことができなかった。ネフスキイが書いてくれたアレクセエフへの紹介状を彼は持ち帰った。そのおかげで、アレクセエフとネフスキイの通信等がエリセエフを通して行われていたことを我々は知ることができる。日仏ソを結ぶ連絡網は、革命後もエリセエフとネフスキイが強い絆で結ばれていたことを明示しているのである。ネフスキイが帰国してからの二人の接触を示す資料に筆者はまだ接する機会がない。

プレトネルはネフスキイの運命について次のような興味深い伝聞を語っている。

私にネフスキイ君の最後についてややくわしい話を聞かせてくれたのは、戦後日本を訪れたエリセエフ君でありました。当時エリセエフ君は、ハーバード大学に付属する燕京東洋学院のディレクターでありましたが、第二次大戦前にソヴィエトから米国へ亡命した「P」[ポッペカ]という有名な学者から、ネフスキイの死について知る事が出来たのだそうです。

ネフスキイの亡くなったのは、はっきりとは判らないけれども、第二次大戦の始まる少し前の事であったらしいのです。磯子夫人と共でありました様です。誠に痛ましいことと言う外ありません（加藤九祚『天の蛇——ニコライ・ネフスキイの生涯』）。

戦後エリセーエフが来日したのは1953年（昭和28）春のことである。その時、エリセーエフとプレトネルの間で、ソビエトに帰国し殺害されたネフスキイのことが話題となった。第2次世界大戦（1939年9月勃発）の少し前、ネフスキイ夫妻が死亡したことをエリセーエフに教えた亡命ソビエト人学者「P」とは、加藤九祚氏が推測するように、ドイツ人とエストニア人を両親とするワシントン州立大学のアルタイ語学者ニコラス・N・ポッペ（1897-1991）であろう。彼はペトログラード大学東洋語学部のネフスキイの後輩であった。ポッペの情報は比較的正確だった。後年、ポッペはネフスキイの運命について次のように書いているが、エリセーエフが聞かされた話もこれと大差なかったと思われる。

1930年代の初めにシュチュツキーは日本に行き、ソビエト連邦での労働条件が非常に良くなったことをネフスキイに伝えた。それでネフスキイは日本人の妻と幼い娘のネリーを連れて国に帰る決心をした。一家は、同じ日本語学者N・I・コーンラドが住んでいたアパートと同じ建物のアパートに引っ越した。ペトログラードスカヤ・ストロナーのツェルコヴナヤ17番にそれはあった。1937年の初めのある夜、ネフスキイと彼の妻は逮捕された。翌朝コーンラドの妻N・I・フェルドマンがネフスキイのアパートの前を通りかかると、ドアが少し開いていて、中から子供のしくしく泣く声が聞こえた。彼女がネフスキイのアパートに入ってみると幼いネリーが一人きりで泣いているのだった。コーンラド家は彼女を引き取り後に養女にした。コーンラド自身も逮捕されたが後に釈放されている。全部で、東洋学研究所の所員90名のうち約40名、すなわちほとんど半数に近い人数が逮捕されたのである（ニコラス・ポッペ著、村山七郎監修、下内充、板橋義三訳『ニコラス・ポッペ回想録』1990年）。

中国学者ユリアン・K・シュツキイ（1897-1938）が来日したのは、正しくは、1928年4月である。彼も後に銃殺刑に処された。ネフスキイ一家が暮らしたアパートの正しい住所は、ブローヒナ通り、17/1、5である。ネフスキイと磯子が逮捕されたのは、それぞれ1937年10月4日、同月8日である。

ネフスキイ夫妻が「日本のスパイ」という罪状でレニングラードで銃殺刑に処せられた正確な年月日は、1937年11月24日であった。この事実が明らかになるまで半世紀以上の時が流れた。エリセーエフもプレトネルも、友人の死亡年月日を知ることなく他界した。留学先の日本から、激動の渦中にある母国の先輩エリセーエフの行く末を案じたネフスキイ、亡命先のパリから革命の体験記を送って後輩ネフスキイの帰国を戒めたエリセーエフ。エリセーエフは国を棄てて生き延

び、学者の生涯を全うした。先輩の警告などを熟慮してなお帰国を断行したネフスキイは、学者の道中途で断ち切られてしまった。

おわりに

『赤露の人質日記』のネフスキイの蔵書印とエリセーエフの献辞をめぐる謎は、長谷川幾久雄の証言で解けた。一方、河合忠信、日野貴夫両氏が提起したエリセーエフとネフスキイの関係の問題については、1922年からネフスキイの帰国までの数年間、二人の間が「断絶」状態などにはなかったことは、石浜純太郎をアレクセーエフに紹介したネフスキイの文章から明らかである。10月革命後もエリセーエフとネフスキイの友人関係は変わることはなかったのである。しかしその後は、ソビエトのネフスキイとフランスのエリセーエフが、双方にその意志があっても、直接連絡をとることができなかったことはソビエトの歴史が教えるところである。